「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」実施報告

ひめゆり平和祈念資料館学芸課長　古賀徳子

取り組みの経緯

ひめゆり平和祈念資料館では、今年 5 月、沖縄の 3 つの学校と連携して、「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」を実施した。高校生が沖縄戦を伝える側になってみることや、その経験を通して学びを深めることを目指して、資料館として初めて行った取り組みである。6 月には県立向陽高等学校で生徒有志による展示ガイド、県立南部商業高等学校・やえせ高等支援学校（併置校）で図書委員・図書班の生徒によるワークショップが実施された。

資料館では、2012 年から夏休みに教員向け講習会を開催し、写真を読み解く「フォトランゲージ」（開発教育協会の教材）などのワークショップを行っている。参加者から「興味、関心を持って展示室を見て回ることができた」という感想が寄せられるなど、手応えを感じていたが、会場や人員の関係で、来館する学校団体への実施は難しかった。

2018 年には、オランダにある「アンネ・フランク・ハウス」の映像制作ワークショップ「メモリーウォーク」を行った。「メモリーウォーク」の大きな特徴は、若い世代が仲間と協力して、映像を制作する過程で、自らが伝える側になるところである。その後、資料館は、参加者が伝える側になることを意識して、映像制作ワークショップや映像コンテストなどの企画に取り組んできた。

2022 年には、県内では初の移動展を今帰仁村と読谷村で開催し、会場でワークショップを行った。移動展のパネルを使って行うのは初めてだったが、開発教育に詳しい玉城直美さんの助言で、「ひめゆり入門 Q&A」などの新しい内容も加わり、理解が深まったとの感想が寄せられた。

こうした経験を重ねる中で、資料館が団体に貸出しているパネル「沖縄戦とひめゆり学徒」を使って、県内の高校生が同世代にガイドをする取り組みができないかと考えた。そのアイディアの元になったのは、「アンネ・フランク・ハウス」が巡回展の開催地で行う「ピア・ガイド」のためのトレーニングである。ピア（peer/ 仲間）とは、同世代や同じような経験を持つ人を表す言葉。アンネ・フランク・ハウスでは、ピア・ガイドが、見学に訪れた若者グループに説明や問いかけを行うことで、対話を促進することを期待している。

沖縄では、6 月の慰霊の日に合わせて、沖縄戦のパネル展を行う学校が多い。もし、パネル展を活用したピア・ガイドのトレーニングが実施できれば、自分の言葉でひめゆりや沖縄戦を説明できる人が増えるうえに、パネル展が生徒同士の対話の場となる。そんなことを考えていた時、ひめゆりに関心を持ち、見学に訪れた向陽高校の生徒や先生と出会い、一緒にやってみることになった。

沖縄県立向陽高校の生徒有志による展示ガイド

向陽高校では、沖縄県のワークショップや沖縄平和賞授賞式に参加した生徒が中心となって、学校でワークショップを企画したり、グループで資料館を訪問したりと、自主的な活動を行っていた。今年 3 月に担当の妻夫木麻紀子先生に企画を提案すると、「同世代と話そう、平和について」をテーマに、学校として積極的に取り組んでくれた。校内で参加希望者を募り、5 月 20 日に「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」（3 時間）を実施した。休日にも関わらず、自主的に 34 人の生徒が参加し、①フォトランゲージで沖縄戦の特徴やひめゆり学徒の体験を学ぶ、②コミュニケーションの練習、③写真やイラストを使ってガイドを行う練習を行った。終了後のアンケートにはこのような感想が寄せられた。



向陽高校でのワークショップ　2023 年 5 月 20 日
写真提供：沖縄県子ども生活福祉部女性力・平和推進課

まだ知らないことがたくさんあると気づいた

●今まで平和学習をしてきたけれど、初めて平和ガイドとしてのワークショップを受けて、改めて自分の沖縄戦に対する知識の少なさに気づいた。

●小さい時から沖縄戦について学んでいてもまだまだ知らないことの方が多くて 沖縄戦というカテゴリーはひとつでも その中にはたくさんの出来事があることを実感して それらの出来事をひとつでも多く後世に伝えていきたいと思った。

●いざ自分が伝える側となる講話を受けてみるとまた違った考え方や見え方ができて 今まで以上に知識が深まったと思う。

フォトランゲージをやってみて

●絵や写真から場面や人物の状況を読み取っていくのは 外しまくりだったけど楽しかった。

●フォトランゲージでは以前に見たこともある写真があったが（略）、写真だけでは伝わらない詳細を説明によって知った時には鳥肌が立つぐらい驚きました。

●たった一つのイラストかもしれないけれど、そこにはいろんな戦争の背景が隠されていること（略）、グループワークでこのイラストについてどう思うか話し合いをして、自分には無い意見を聞くことが出来て凄くいい機会だったと思う。

聞き手の興味を引き出すことを学んだ

●ガイドする時に相手に興味を持ってもらったり、伝えるときにどこに注目するかを学ぶのは初めてだったのでとても興味深かったです。

●発表をする時、どのように聞き手の興味をひきつけられるかを学び、コミュニケーションを大切にしながら説明することができて良かった。

●話し合って考えを提供し合うのは全員の積極性を出すのに有効だと思えたので ガイドとして活動するときには相手の知っていることを上手く引き出す質問・対話形式を心掛けたい。

その後、生徒たちはパネル展やガイドの準備を行い、6月には訪れたクラスメイトや友人にガイドを行った。7月の文化祭でも、パネル展と来場者への展示ガイドを行った。10月には、修学旅行で訪れた横浜商業高校の生徒にパネル展のガイドを行い、「戦争と子どもの人権」というテーマでディスカッションをした。

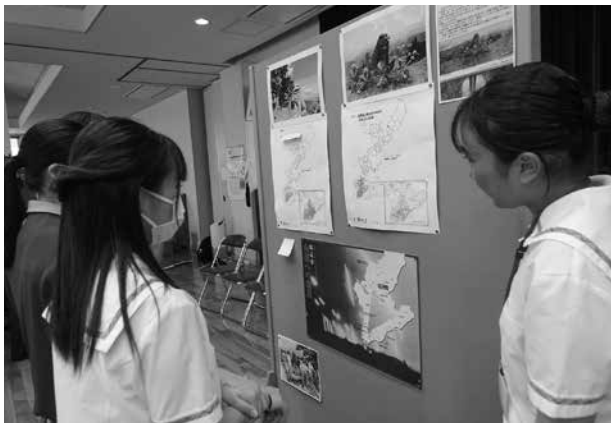
私も6月13日にガイドの様子を見せてもらったが、ガイドの生徒が自分自身の疑問や関心をもとに普段の口調で説明や問いかけを行うため、聞く側の生徒は構えずに率直な感想や疑問を口にしていた。そして、「自分と同じような疑問をもって説明してくれたのわかりやすかったし、もっと知りたくなった」と感想を語っていた。ガイドの生徒も「自分では考えたことのない意見が聞けて、とても楽しかった」「お互いにコミュケーションを取りながら考えを深めていけた」と話していた。

向陽高校の実践では、生徒がピア・ガイドを行うことによって、①沖縄戦への理解や関心が高まる、②自分の言葉で伝える力や人の意見を引き出すスキルが身につく、③伝える経験をすることで、沖縄戦を伝える役割を担うのは体験者や専門家だけでなく、自分たちでもあるという意識が芽生えるなどの成果が見られた。

なお、向陽高校の実践は、琉球新報、沖縄タイムスの他に、2023年6月23日朝のNHK「おはよう日本」で取り上げられ、注目を集めた。



向陽高校の生徒によるガイド　2023年6月13日



向陽高校の生徒によるガイド　2023年6月13日

沖縄県立南部商業高校・やえせ高等支援学校の図書委員・図書班の生徒によるワークショップ

南部商業高校・やえせ高等支援学校の図書委員会は、昨年度、「沖縄戦」×「SDGs 壁新聞」の発表と、「私たちにできる平和のつくり方」をクラスで討議し、その内容を図書館で展示した。図書委員会顧問の下地孝子先生に連絡を取ったところ、ちょうど今年は「沖縄戦を語り継ぐ」をテーマにするとのことで、連携して取り組むことになった。図書委員の生徒が自分のクラスでワークショップの進行を行うことを目標にした。全校集会ではなく、クラスごとに行ったのは、「県民の約 9 割が戦後生まれとなり、沖縄戦の記憶継承が一層難しくなる中、生徒が同世代と沖縄戦について学び合い、自分事として考える機会をつくることが重要であり、生徒自身に沖縄戦を伝えていく経験をさせたい」という下地先生の思いがあったためである。

5月1日の放課後、図書委員や平和同好会の生徒34人を対象に、「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」（75 分）を行った。時間の都合で、コミュニケーションの練習は省略し、「ひめゆり入門Q&A」と「フォトランゲージ」「わたしの気持ち」というワークを行った。下地先生は、生徒の様子を見て、「『文字』情報だけでなく『写真やイラスト』を用いて問いかけるという手法は、やえせ高等支援学校の生徒にとっても汎用性が高く、本校でも実施できるという手応えを感じた」とふりかえる。参加した生徒たちは、下地先生や司書の柳堀夏乃さんのサポートのもとで、6月の本番に向けて放課後の練習に取り組んだ。

6 月 14 日当日は 5・6 校時を使って、図書委員と図書班の生徒 66 人が進行役を担い、全校の各教室（15 クラス）でワークショップとアニメ「ひめゆり」の上映を行った。授業を終えた生徒たちは、「クラスメイトに発表する事でどのような事が起きたかさらに理解を深める事ができたと思う」（3年）、「戦争についての情報を伝える側に初めてなってみて、これを伝えるのがどれだけ大変か断片的に知ることができました。想像を絶する辛さを伝えてくれた方々に敬意を表したい」（3年）、「沖縄戦の恐ろしさを伝えられたか心配になった」（1 年）、「やっぱりこれは誰かが伝えていかなきゃいけないと思った」（1 年）など、伝える経験を通して、沖縄戦への理解が深まった、伝える難しさや重要性を感じたという声が寄せられた。「とても緊張したが、いい経験になって良かった。少しでも多くの人が戦争についての出来事を知ってくれたら嬉しい」（2 年）といった、生徒がすでに伝える側となっていることがわかる感想もあった。

クラス担任の先生からも、「事前準備・指導のおかげで、大人しい図書委員さんが皆の前でしっかり進行して、話しができた。本番は、クラスでおしゃべりが少しあったが、周囲で注意してくれる様子が見られたり、何より図書委員さんの声が大きくなっていったりと、自分たちで操作確認やグループ巡視などしてくれて、とてもとても成長した様子が見られました！」などの報告があった。



南部商業高校・やえせ高等支援学校　ワークショップ後に、アンケートを記入する生徒たち。中央は担当の下地孝子先生。 2023 年 5 月 1 日



南部商業高校・やえせ高等支援学校の図書館に展示された「沖縄戦とひめゆり学徒」のパネル。沖縄県平和祈念資料館の実物資料や沖縄戦関係の書籍も紹介されていた。 2023 年 6 月 14 日

「国際平和ワークショップ」（沖縄県主催）での実施

10 月 14 日、「国際平和ワークショップ」（沖縄県子ども生活福祉部女性力・平和推進課主催）に講師として招かれ、「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」を実施した。県内の 7 つの高校から生徒 33 人、サポート役の大学生 5 人、教員・社会人 5 人、合わせて 43 人が参加した。沖縄平和賞受賞団体のひとつとして、資料館の活動を沖縄の若い世代に伝えるという趣旨である。当館にとっては、向陽高校、南部商業高校・やえせ高等支援学校に続いて、他の高校の生徒にピア・ガイドのトレーニングを行う機会となった。

最初に、JICA の島田具子さんが「国際協力による平和構築」について講演と質疑応答を行った。カンボジアの地雷・不発弾問題や平和博物館、コロンビアの平和教育に、沖縄の経験が役立っていると聞き、生徒たちは非常に関心を持っていた。

その後は、私が「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」（3 時間）を担当した。参加者は別々の学校から集まっているため、「どこの学校か」、「出身地はどこか」、「沖縄戦の関心度と知識は？」と質問し、回答に応じて移動してもらった。出身地ならではの沖縄戦学習があったかと聞くと、北谷町の生徒は「米軍上陸地」、糸満市の生徒は「激戦地」と答えてくれた。

次にコミュニケーションの練習を行った。上手な聞き方、下手な聞き方にはどんなものがあるかを確認した後、ペアになって下手な聞き方をやってみると、話しにくい、話したくなくなる、との感想が出た。上手な聞き方をやってみると、話が盛り上がり、話し手も聞き手も生き生きとした表情に変わった。生徒たちは、練習を通して、聞くことの大切さを理解していった。グループの緊張をやわらげ、参加者同士がうちとけるきっかけにもなった。

午後は「ひめゆり入門 Q&A」、「フォトランゲージ」、「ガイドの練習」、「グループの話し合い」を行った。終了後、参加者からは、今までは戦争については「辛いとか怖いとか一言で終わるような感想しか思わなかったけど」、グループの話し合いで自分にはなかった視点や意見が聞けて、これから自分が何をしたらいいのか考えたという感想や、「同世代の普段会うこともないみんなと出会えてすごく不思議で忘れられない時間」になったという声が寄せられた。こうした反応から、上の世代が下の世代に教えるだけでなく、同世代と対等な立場で学び、話し合うことが若い世代にとって大きなインパクトになるとわかった。



国際平和ワークショップ　2023 年 10 月 14 日
写真提供：沖縄県子ども生活福祉部女性力・平和推進課

対話を促すピア・ガイド

平和教育については沖縄でも、戦争体験者の高齢化、教員の多忙化や時間確保の難しさ、マンネリ化など、多くの課題が指摘されている。しかし、現場の努力によって、展示や朗読、創作ダンス、演劇や音楽など、多彩な取り組みが行われてきた。生徒会や図書委員会での戦跡めぐりや、地域での平和学習で学んだ生徒が全校集会で発表する例もある。生徒が学んだことや、感じたことを他の生徒に伝えるという点はどの方法も共通しているが、展示を使ったピア・ガイドの場合は、説明や問いかけによって、他の生徒たちに対話を促すところが特徴である。

資料館としてはできれば今後も「高校生が同世代に伝えるためのワークショップ」を実施したいと考えているが、学校に平和学習の予算がない中、ボランティアで学校への職員の派遣を続けるのは難しいため、実施の回数や時期については課題が残されている。